

みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

ふたつの模型が語るもの

企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」2017年4月11日（火）まで

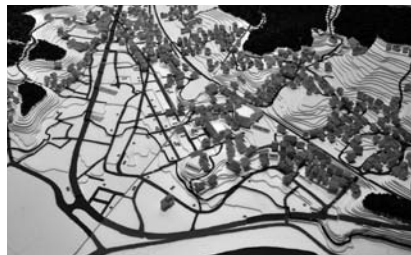
企画展「津波を越えて生きる」では、展示の中心となる岩手県大槌町の吉里吉里地区をあらわした1000分の1模型が、ふたつ並べて展示されています。これらは企画展プロジェクトリーダーの竹沢尚一郎教授の手により制作されました。

ふたつの模型は、東日本大震災による被災前と、被災後の吉里吉里地区のまちの姿をあらわしています。制作は、復興計画の策定のために国土交通省が新しく作った地形図をもとに標高2メートル刻みに土台を作ることからはじまり、被災前のは住宅地図や航空写真を参考に、被災後のものは地域を一軒一軒歩いて家屋を作っていました。ひとつが完成するのに1カ月半かかったとのこと。苦心したのは土台を作るところ。正確に作らないと、家を図面どおりに配置することができないのだそうです。被災前の模型の制作や屋根の色塗りには地元の方々にも協力いただきました。「俺の家はもっと大きかった」「屋根は南向きだった」などと懐かしむ声もあがり、和やかな雰囲気だったそうです。

竹沢教授が模型を制作したのは、失われてしまったまちを再現するとともに、震災の教訓を現地の人だけでなくわたしたち自身にも伝えるものになりたいというのが理由です。被災

後の模型は、まちのどの部分が被災したのかがわかるだけではありません。逃げないで家にとどまった方、逃げる途中で亡くなった方をあらわすポイントに加え、被災前に住民に配布されたハザードマップの津波の浸水予測（標高8メートル）と、明治29年の明治三陸地震での浸水域（標高14メートル）がラインで示されています。東日本大震災では実際には標高16メートル付近まで津波が来ていたといわれますが、この模型からは、ハザードマップと明治三陸地震のふたつのラインのあいだで亡くなった方が多いことがわかります。もし明治三陸地震での教訓をいかせていたら、被災状況はどのようになっていたのか。さまざまなことをふたつの模型は伝えてくれます。竹沢教授は、企画展の終了後はこの模型を地元へ寄贈することになっているそうです。

災害は、その地域の人びとだけの問題ではありません。形は違えど、誰にでも起こることかもしれません。そのとき、わたしたちはどうするのか。過去の教訓を未来へどのように継承していくのか。東日本大震災の被災と、その復興のため奮闘する大槌町の人びとの姿をとおして、これからのわれわれについても考える企画展に、ぜひお越しください。



左が被災前、右が被災後の吉里吉里地区の模型（部分）です。浸水予測や実際の浸水域の標高、亡くなった方の場所など、さまざまなことを伝えてくれます

みんなぱくをもっと楽しみたい人のために—————会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会（一般財団法人千里文化財団）」までお問い合わせください。

電話06-6877-8893（平日9:00～17:00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館

キャンパスメンバーズ

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。